国際研究論叢　21（3）：35～53，2008

「リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ」に関する調査 Ⅷ
―デートDVの現状、および、被害・加害の関係とその特徴―

西　岡　敦　子[*1]　　小　牧　一　裕[*2]

Research in Reproductive Health and Rights VIII: Date Violence and the Relationship between Assailants and Victims and their Characteristics

Atsuko Nishioka[*1], Kazuhiro Komaki[*2]

Abstract

The purpose of this study was to 1)determine the current incidence of date violence, 2) investigate the relationship between assailants and victims and the characteristics of both.

There were 324 undergraduate participants of whom 177 were female and 147 male.

Major findings were: 1) 75%, had been victims of dating violence and 62.3% had been assailants; 2) the victims were not satisfied with the relationship and felt inferior to their partners; 3) assailants held others in low esteem and had strong gender roles; 4) victims and assailants shared the common characteristics of low basic socialization and high anger; and 5) it became clear that both victims and assailants shared similar group characteristics.

The results suggest the importance of education in raising basic socialization, managing anger and improving relationship skills.

キーワード

リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ、デートDV、被害、加害、社会性、怒り

Ⅰ．問　題

これまで、リプロダクティヴ・ヘルス／ライツの概念のもと、大学生を対象に様々な調査を継続してきた。今回は、若者の間で問題視され始めているデートDVについて取り上

＊１にしおか　あつこ：大阪国際大学人間科学部准教授〈2007.12.19受理〉
＊２こまき　かずひろ：大阪国際大学人間科学部教授

げる。

これまで、ドメスティック・バイオレンス（以下、DVとする）の認識は、大人の問題、しかも、婚姻関係（事実婚を含む）にあるものがその対象とされてきた。しかし、内閣府男女共同参画局（2006）の調査によると、10歳代から20歳代時に、交際相手から「身体的暴力」、「心理的攻撃」、「性的強要」のいずれかを受けたことのある女性が13.5％いた。また、20歳代の女性に限ると22.8％となり、およそ４～５人に１人の割合に上ることになる。このデータは、被調査者の過去に遡っての回答結果であるが、現代の若者においては、同じく内閣府（2007）が全国規模のデートDV調査をインターネットで行っている。それによると、男女ともに半数が交際相手から肉体的・精神的暴力を受けた経験があると回答した。しかしながら、その状況が十分理解されているとは思えない。次に示すものは、著者が大学生対象にDVに関する内容の授業を行った後の感想である。「DVという言葉は知っていたが、ただの夫婦ゲンカと思っていた。」、「逃げればいいのに、なぜ逃げないのかずっと不思議だった。今日その意味がやっと分かった。」といった認識レベルである。そのような中で、“人間と性”教育研究協議会（2007）は、性教育に「デートDV」の実践を盛り込むことは急務であると指摘し、発行雑誌の中で特集を組むに至っている。

これまで、我が国におけるＤＶ問題は、ＤＶ被害者側の状況把握、心理や救済が中心であった。近年になりようやく加害者側からのアプローチとして加害者更生が考えられるようになってきた（例えば、古賀（2005））。また、ようやくＤＶ被害が児童に及ぼす影響も検討され始め（永末　他（2007））、若年出産をDVとの関連で考察したものも見られるようになり（中澤　他（2006））、DVに関する研究も広がりを見せている。そのような中で、デートDVに関しては、2002年にＤＶ加害者に対する再教育専門プログラムを実施した「aware」が、デートDVにも関心を持ち、教育の場においてデートDV教育をすることの必要性を説いている（山口（2003））。DV問題の取り組みに関しては日本の30年先を行っているというアメリカでさえ、デートDVに関するプログラム開発はコロラド州デンバーの1996年のことである（山口（2005））。

また、ＤＶの特徴についても、加害者研究がなされる中でさらに明らかになりつつある。ＤＶの種類や関連要因について述べておく。

DVの暴力の種類は様々である。「夫（恋人）からの暴力」調査研究会（2002）にある、ミネソタ州ドゥルース市のドメスティック・バイオレンス介入プロジェクトが作成したものの加筆修正版によると、DVの種類は、身体的暴力の他、社会的隔離（孤立させる）、心理的暴力・言葉による暴力、経済的暴力、性的暴力、子どもを利用した暴力、強要・脅迫・威嚇、男性の特権をふりかざす、過小評価・否認・責任転嫁に分類され、それぞれに例が示されており、これは広く知られているものである。また、測定尺度としては、相馬（2005）が使用したものとして、「直接的暴力被害尺度」、「間接的暴力被害尺度」に分類されたもの、同様に相馬（2006）が使用したものとして、ISDP2（Schmitt（Bradley大学）が企画・管理した国際調査プロジェクト）の加害尺度がある。さらに、NPO法人「DV防止ながさき」（2007）が大学生対象に行った調査の中では、携帯電話に関する新しい束縛状況なども示されている。

加害者要因の性格特性や行動傾向の特徴に関しては、その性質より、非暴力セミナーなどによる事例研究的なものから、その関連要因を知ることができる。その一つに、中村（2003）らが運営する「男の非暴力グループワーク」がある。そのプログラムを支えているものの１つに、暴力の問題の源に「男らしさ」があるという考え方があると述べている。その「男らしさ」に関して、下地（1999）は男らしさに固執する男性と女らしさにこだわる女性の組み合わせこそがDVの温床になると述べている。また、高橋（2007）は、2006年の定時制高校における「高校生性意識調査」から、ジェンダーバイアスによる性意識や関係性がデートDVを引き起こしていく状況があると述べており、ＤＶ問題には「男らしさ」が幅を利かせていることがわかる。

また、怒りと怒りの処理の問題がある。中村（2003）によると、本来、怒りと暴力は別のものであり、直接的にDVに繋がるものではないとある。ストレートに怒りを表現できれば暴力に訴える必要はないのである。しかし、怒りと暴力を混同してしまい暴力によって怒りを表現してきたという加害者の気付きが示されている。また、草柳（2004）も、怒りと暴力はイコールではなく、怒りを暴力につなげているのは加害者本人であると述べている。その怒りの処理に関してはアサーションの問題がある。同じく中村（2003）は、怒りの感情を言葉でストレートに伝えるすべがないDV加害者の事例をあげている。

一方、被害者要因としては、一般的にＤＶ被害者は自己主張せず、加害者の怒りの静まるのをじっと耐える状況にあるといわれている。ＤＶ被害者の共通点として、下地（1999）は、自己評価の低さ、自尊心のなさを指摘している。西岡（2006）においても、ＤＶ被害者の自尊感情の低さが示されている。また、伊田（2007）はデートDVをシングル単位的な恋愛論と結びつけ、自立（シングル単位感覚をもって生きる）の大切さから、自己肯定観を持てる主体となれるような教育を求めている。

また、DVには、当然、双方の関係性が問題になる。草柳（2004）は、人生を共にする際に必要なものは、信頼・安心・尊重であるとしている。また、川崎・長安・上村・関口（2007）は、性を大切な人権として捉え、その関係性の平和を築くために、安全に安心して信頼できる間柄をあげている。そのためには、当然、他者尊重が重要である。他者尊重に関しては、中島（2007）が運営しているDVについての講演・研修・ワークショップを行う「レジリエンス」の活動内容に見ることができる。レジリエンスで高校や大学でデートDVについて話す際には、必ず尊重というテーマに触れるという。相手に対する尊重がないと、代わりに見下しや軽蔑という要素が増えるからだという。この他者尊重は、上述したアサーションも含め、社会性を構成する要素でもある。

以上のように、ＤＶに関する研究は進展を見せてはいるが、DVに関する調査は配偶者のあるものが中心であり、大学生を対象としたもの（例えばNPO法人「DV防止ながさき」（2007）、山本（2005））は少なく、その実態は明らかにされていない。そこで、本研究の目的は、先行研究をもとに、性別役割意識、怒り、他者尊重やサーションを含む社会性、関係性への満足や力関係、自尊感情を関連要因として取り上げ、大学生におけるデートDVの現状を把握し、被害と加害の関係やそれらの特徴を探索的に検討することである。

Ⅱ．方　法

Ⅱ－１．被調査者

被調査者は、本大学に在籍する学生を中心とした大学生であり、有効回答数は女性246人、男性209人、計455人であった。その内、DVに関する調査であるため、現在、および、過去を通じて恋人と呼べる人がいない者を除いた、女性177人、男性147人、計324人を分析対象とした。その内訳は、Table１のとおりである。

Table1 分析対象者

	女性	男性	計
18歳	60	34	94
19歳	56	34	90
20歳	33	19	52
21歳	20	22	42
22歳	5	31	36
23歳	2	3	5
24歳	1	4	5
計	177	147	324

Ⅱ－２．調査方法

調査方法は質問紙による無記名回答方式で集団調査法を用いた。なお、質問紙への回答の可否は被調査者自身で選択可能である。なお、実施時期は2007年８月、および、９月である。

Ⅱ－３．調査項目

設問項目はA～Hまでの８つから構成される。

設問Aは、「怒り」を問うものである。

怒りやすさを性格特性として扱い、鈴木・春木（1994）のSTAXI日本語版（State-Trait Anger Expression Inventory）の下位尺度である、状態怒り、特性怒り、怒りの表出より、特性怒りを採用した。「気が短い」、「怒りっぽい」、「せっかちである」などの10問から成り、「とてもよくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの４件法であり、得点の高い方が特性怒りが高いとされる。

設問Bは、「恋人と呼べる人の存在の有無」を問うものである。

DVに関する調査であるため、現在、および、過去を通じて恋人と呼べる人の有無を尋ねた。現在、および、過去を通じて恋人と呼べる人がいない被調査者を分析対象から外した。

設問Cは、「恋人と呼べる人との関係性」について問うものである。

直接「彼／彼女との関係性に満足している」、「彼／彼女を信頼している」、「彼／彼女といる時、安心感がある」などの５問を、「当てはまる」から「当てはまらない」までの５件法で尋ねた。得点の高い方が関係性が良好である。また、双方の力関係を直接的に５段階で回答を求めた。

設問D-1は、「DV被害の種類とその度合い」を、設問D-2は、「DV加害の種類とその度合い」を問うものである。

DVの暴力の種類を網羅することと、それぞれの項目数のバランス、および、被調査者が大学生であるということの３つを考慮し、上述した相馬（2005）が使用した尺度、ISDP2の加害尺度、NPO法人「DV防止ながさき」が行った調査項目を上述のミネソタ州の細分類に従って漏れがないように項目の選定を行った。その結果、相馬（2005）が使用した「直接的暴力被害尺度」９問、「間接的暴力被害尺度」10問に、「社会的隔離（孤立させる）」にあたる項目１問、「心理的暴力」にあたる項目１問、「性的暴力」にあたる項目３問、「過小評価」にあたる項目１問を追加した25問が妥当であろうと判断し、今回の項目として採用した。「あなたに平手打ちをすることが、」、「相手が原因で経済的に困難な状況になることが、」、「勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックすることが、」、「コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力しないことが、」などで、それぞれの行為が「日常的にあった」から「まったくなかった」までの５件法で尋ねた。暴力の頻度が高い方が高得点となる。

また、相馬（2005）が使用したものは被害尺度であったため、設問D-1のDV被害は、相馬の設問項目に合わせ、一方、設問D-2はDV加害であるため、すべて、被調査者が相手に行った場合に設問項目を置き換えた。

設問Eは、「社会性」を問うものである。

DVを行う人は特別な人ではなく、二人の関係外ではごく普通の人で通っている場合がほとんどであると言われている。そこで、社会性を問う設問の設定を考えた。前報でも述べたが社会性の意味するところは広いが、ここでは、筆者らが作成した「社会性尺度」の下位尺度（西岡・小牧（2007））から「アサーション」、「他者尊重」、「基本的社会性」の全18問を採用した。「疑問だと感じたらそれを堂々と言える」、「お互いに傷つけないように気を使う」、「人との約束を守ることができる」などで、「当てはまる」から「当てはまらない」の５件法で問うものである。社会性が高い方が高得点となる。また、西岡（2004）において、一般的アサーションと親密な関係におけるそれとでは相違があることを報告済みではあるが、ここでは社会性として検討するものとする。

設問Fは、「ジェンダー」を問うものである。

鈴木（1994）の「平等主義的性役割態度スケール短縮版」15問より５問を採用した。「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である」などの５問であり、「当てはまる」から「当てはまらない」の５件法で問うものである。ジェンダー意識の高い方が高得点となる。

設問Gは、「自尊感情」を問うものである。

山本・松井・山成（1982）による「自尊感情尺度」の全10問を採用した。「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「色々な良い素質をもっている」などで、「当てはまる」から「当てはまらない」の５件法で問うものである。自尊感情が高い方が高得点となる。

設問Hは、「DVの知識」を問うものである。

設問Dより、DVとしてわかりにくいとされている、社会的暴力、心理的暴力、性的暴力の３つを選択した。それぞれ親密な関係においても暴力になることを知っていたか否かで回答を求めた。ＤＶ知識のない方が高得点となる。

最後に、フェイス項目として、性別と年齢を問うもの２問を加え、総設問数は106問である。

Ⅲ．結　果

Ⅲ－１．ＤＶ被害およびＤＶ加害の現状

１）ＤＶ被害の現状

①ＤＶ被害者（合計）の現状

ＤＶ被害の項目について、学生にはふさわしくないと思われる項目等２項目を除き、直接的暴力被害と間接的暴力被害および性被害の計23項目の合計得点をＤＶ被害得点とした。その分布の結果がFig.1である。被害を全く受けていない（23点）人は全体の約4分の

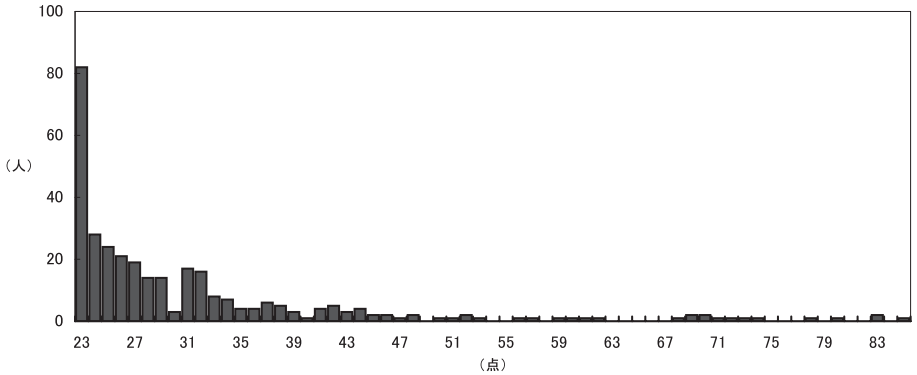

Fig.1　DV被害得点（合計）の分布

1（25.3%）で、何らかの被害を受けている人は全体の約4分の3（74.8%）を占めていた。また、45点以上が約1割を占めており、最高得点は85点と多くの項目で日常的に、もしくは、かなり被害にあったと回答していた。

②ＤＶ直接被害者の現状

ＤＶ直接被害について、直接的暴力被害の計9項目の合計得点をＤＶ直接被害得点とした。被害を全く受けていない（9点）人は全体の約3分の2（64.8%）で、何らかの被害を受けている人は全体の約3分の1（35.2%）を占めていた。また、14点以上が約1割を占めており、最高得点は35点であった。

③ＤＶ間接被害者の現状

ＤＶ間接被害の項目について、間接的暴力被害の計11項目の合計得点をＤＶ間接被害得

点とした。被害を全く受けていない（11点）人は全体の約3割（29.6％）で、何らかの被害を受けている人は全体の約7割（70.4％）を占めていた。また、27点以上が約1割を占めており、最高得点は51点であった。

④ＤＶ性的被害者の現状

ＤＶ性的被害の項目について、性被害の計3項目の合計得点をＤＶ性的被害得点とした。被害を全く受けていない（3点）人は全体の約3分の2（66.0％）で、何らかの被害を受けている人は全体の約3分の1（34.0％）を占めていた。また、6点以上が約1割を占めており、最高得点は14点であった。

２）ＤＶ加害の現状

①ＤＶ加害者（合計）の現状

ＤＶ加害の項目について、学生にはふさわしくないと思われる項目等2項目を除き、直接的暴力加害と間接的暴力加害および性加害の計23項目の得点をＤＶ加害得点とした。その分布の結果がFig.２である。全く加害を与えていない（23点）人は全体の37.7％で、何

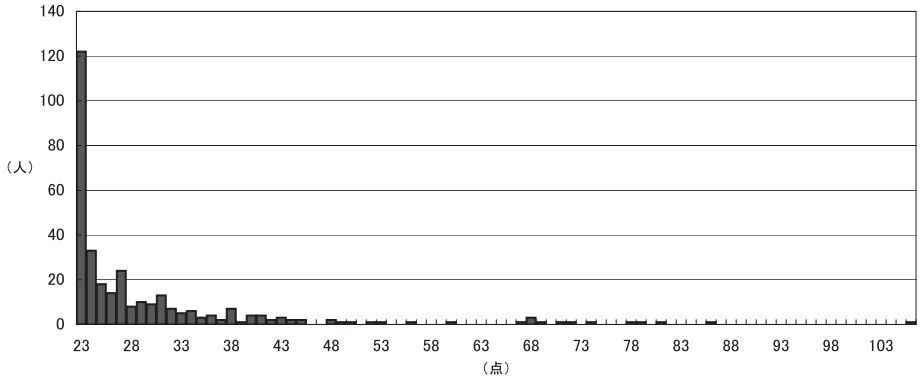

Fig.2　DV加害得点（合計）の分布

らかの加害を与えている人は全体の6割を超えていた（62.3％）。また、41点以上が1割を超えており、最高得点は106点とほとんどの項目で日常的に、もしくは、かなり加害を与えていると回答していた。

②ＤＶ直接加害者の現状

ＤＶ直接加害の項目について、直接的暴力加害の計9項目の合計得点をＤＶ直接加害得点とした。加害を与えていない（9点）人は全体の約7割（71.6％）で、何らかの加害を与えている人は全体の約3割（28.4％）を占めていた。また、14点以上が約1割を占めており、最高得点は40点であった。

③ＤＶ間接加害者の現状

ＤＶ間接加害の項目について、間接的暴力加害の計11項目の合計得点をＤＶ間接加害得点とした。加害を与えていない（11点）人は全体の約4割（42.3％）で、何らかの加害を

与えている人は全体の約6割（57.7％）を占めていた。また、24点以上が約1割を占めており、最高得点は55点であった。

④ＤＶ性的加害者の現状

ＤＶ加害の項目について、性加害の計3項目の合計得点をＤＶ性的加害得点とした。性加害を全く与えていない（3点）人は全体の約4分の3（75.9％）で、性の加害を与えている人は全体の約4分の1（24.1％）を占めていた。また、6点以上が約1割を占めており、最高得点は11点であった。

Ⅲ－２．ＤＶ被害者および加害者の特徴

１）ＤＶ被害者の特徴

①ＤＶ被害者（合計）の特徴

ＤＶ被害者の特徴を探るため、ＤＶ被害者をＤＶ被害なし群（ＤＶ被害がまったくない、N=82）、ＤＶ被害低群（ＤＶ被害有りの中で得点低中位74％、N=179）、ＤＶ被害高群（ＤＶ被害有の中で得点上位26％、N=63）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable2に示した。分散

Table２　被害(全体)の程度による平均値比較

	A 被害なし群 (N=82)		B 被害低群 (N=179)		C 被害高群 (N=63)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A-B	B-C	A-C
基本的社会性	21.94	5.03	22.26	4.27	19.67	5.87		*	*
怒り得点	22.55	5.29	23.20	4.86	25.22	6.81		*	*
関係満足	12.18	2.52	12.37	2.54	10.65	3.16		*	*
力関係	2.95	1.05	3.02	1.12	3.52	1.26		*	*
DV知識	4.37	1.06	4.21	1.03	4.62	1.10		*	
自尊得点	31.05	6.05	30.01	6.14	28.13	6.69			*
他者尊重	18.18	4.03	18.72	3.60	17.63	4.12			
性役割	11.78	4.21	11.87	4.28	13.06	4.34			
アサーション	23.11	6.75	23.64	5.50	21.87	6.49			

＊p<.05

分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性（F(2,321)=6.95,p<.001）、関係満足（F(2,321)=10.03,p<.001）、怒り得点（F(2,321)=4.73,p<.01）、ＤＶ知識（F(2,321)=3.54,p<.05）、自尊得点（F(2,321)=3.98,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ被害なし群（$\bar{X}$=21.94）、ＤＶ被害低群（$\bar{X}$=22.26）の得点はＤＶ被害高群（$\bar{X}$=19.67）の得点よりも高く、関係満足のＤＶ被害なし群（$\bar{X}$=12.18）、ＤＶ被害低群（$\bar{X}$=12.37）の得点は、ＤＶ被害高群（$\bar{X}$=10.65）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は他の群よりも社会性が低く、関係に満足していないことを示していた。また、怒り得点のＤＶ被害なし群（$\bar{X}$=22.55）、ＤＶ被害低群（$\bar{X}$=23.20）の得点はＤＶ被害高群（$\bar{X}$=25.22）の得点よりも低く、「高群」では怒りの得点が最も高いことを示していた。力関係のＤＶ被害なし群

($\bar{X}$= 2.95)、ＤＶ被害低群（$\bar{X}$= 3.02）の得点はＤＶ被害高群（$\bar{X}$= 3.52）の得点よりも低く、「高群」は相手の方がより強い（優位）と認識していた。ＤＶ知識では、ＤＶ被害低群（$\bar{X}$= 4.21）とＤＶ被害高群（$\bar{X}$= 4.62）との間に有意な差が見られ、「高群」で知識が低かった。さらに自尊得点では、ＤＶ被害なし群（$\bar{X}$=31.05）とＤＶ被害高群（$\bar{X}$=28.13）との間で差が認められ、「なし群」の方が「高群」よりも自尊心が高いことを示していた。

②ＤＶ直接被害者

ＤＶ直接被害者の特徴を探るため、ＤＶ直接被害者をＤＶ直接被害なし群（ＤＶ直接被害がまったくない、N=210）、ＤＶ直接被害低群（ＤＶ直接被害有りの中で得点中低位64％、N= 73）、ＤＶ直接被害高群（ＤＶ直接被害有の中で得点上位36％、N=41）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable３に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基

Table３　直接的被害の程度による平均値比較

	A 被害なし群 (N=210)		B 被害低群 (N=73)		C 被害高群 (N=41)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A−B	B−C	A−C
基本的社会性	22.10	4.40	22.01	4.70	18.90	6.61		*	*
怒り得点	23.03	5.05	23.52	5.05	25.32	7.57			*
関係満足	12.23	2.57	11.79	2.87	11.12	3.17			*
力関係	2.97	1.08	3.19	1.15	3.61	1.37			*
DV知識	4.30	1.03	4.32	1.04	4.51	1.25			
自尊得点	30.55	6.31	28.95	6.01	28.34	6.30			
他者尊重	18.52	3.74	18.49	3.24	17.39	4.99			
性役割	11.95	4.22	11.66	4.15	13.49	4.68			
アサーション	23.35	6.12	23.07	4.82	22.37	7.57			

＊p<.05

本的社会性（F(2,321)=7.85,p<.001）、関係満足（F(2,321)=3.08,p<.05）、怒り得点（F(2,321)=3.07,p<.05）、力関係（F(2,321)=4.92,p<.01）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ直接被害なし群（$\bar{X}$=22.10）、ＤＶ直接被害低群（$\bar{X}$=22.01) の得点はＤＶ直接被害高群（$\bar{X}$=18.90）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。また、怒り得点のＤＶ直接被害なし群（$\bar{X}$=23.03）の得点はＤＶ直接被害高群（$\bar{X}$=25.32）の得点よりも低く、「高群」では「なし群」よりも怒りの得点が高いことを示していた。力関係のＤＶ直接被害なし群（$\bar{X}$= 2.97）の得点はＤＶ直接被害高群（$\bar{X}$= 3.61）の得点よりも低く、「高群」では相手の方がより強い（優位）と認識していた。また、関係満足のＤＶ直接被害なし群（$\bar{X}$=12.23）の得点は、ＤＶ直接被害高群（$\bar{X}$=11.12）の得点よりも高く、「高群」では「なし群」よりも関係に満足していないことを示していた。

③ＤＶ間接被害者

ＤＶ間接被害者の特徴を探るため、ＤＶ間接被害者をＤＶ間接被害なし群（ＤＶ間接被害がまったくない、N=96）、ＤＶ間接被害低群（ＤＶ間接被害有りの中で得点低中位69％、N=157）、ＤＶ間接被害高群（ＤＶ間接被害有の中で得点上位31％、N=71）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable４に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本

Table４　間接的被害の程度による平均値比較

	A 被害なし群 (N=96)		B 被害低群 (N=157)		C 被害高群 (N=71)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A-B	B-C	A-C
基本的社会性	22.25	4.88	22.06	4.30	20.04	5.82		＊	＊
怒り得点	23.03	5.68	23.12	4.77	24.65	6.41			
関係満足	12.34	2.47	12.22	2.60	11.00	3.15		＊	＊
力関係	2.95	1.06	3.05	1.12	3.43	1.26			＊
DV知識	4.29	1.07	4.27	1.04	4.52	1.09			
自尊得点	31.21	5.76	29.48	6.30	29.10	6.74			
他者尊重	18.23	3.83	18.65	3.67	17.96	4.15			
性役割	11.74	4.27	11.99	4.29	12.72	4.31			
アサーション	23.20	6.55	23.39	5.52	22.59	6.50			

＊p<.05

的社会性（F(2,321)=5.23,p<.01）、関係満足（F(2,321)=6.20,p<.01）、力関係（F(2,321)=3.57,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ間接被害なし群（$\bar{X}$=22.25）、ＤＶ間接被害低群（$\bar{X}$=22.06）の得点はＤＶ間接被害高群（$\bar{X}$=20.04）の得点よりも高く、関係満足のＤＶ間接被害なし群（$\bar{X}$=12.34）、ＤＶ間接被害低群（$\bar{X}$=12.22）の得点は、ＤＶ間接被害高群（$\bar{X}$=11.00）の得点よりも高かった。つまり、「高群」は他の群よりも社会性が低く、関係に満足していないことを示していた。また、力関係のＤＶ間接被害なし群（$\bar{X}$= 2.95）の得点はＤＶ間接被害高群（$\bar{X}$= 3.43）の得点よりも低く、「高群」は相手の方がより強い（優位）と認識していた。

④ＤＶ性的被害者

ＤＶ性的被害者の特徴を探るため、ＤＶ性的被害者をＤＶ性的被害なし群（ＤＶ性的被害がまったくない、N=215）、ＤＶ性的被害低群（ＤＶ性的被害有りの中で得点低中位69％、N= 75）、ＤＶ性的被害高群（ＤＶ性的被害有の中で得点上位31％、N=34）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable５に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、怒り得点（F(2,321)=4.00,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、怒り得点のＤＶ性的被害なし群（$\bar{X}$=22.93）の得点はＤＶ性的被害高群（$\bar{X}$=25.65）の得点よりも低く、「高群」では「なし群」よりも怒りの得点が高いことを示していた。

Table５　性被害の程度による平均値比較

	A 被害なし群 (N=215) 平均値	SD	B 被害低群 (N=75) 平均値	SD	C 被害高群 (N=34) 平均値	SD	多重比較の結果 A−B	B−C	A−C
基本的社会性	21.86	4.87	21.75	4.38	20.35	6.02			
怒り得点	22.93	5.19	23.85	5.44	25.65	6.62			＊
関係満足	12.13	2.82	11.93	2.56	11.26	2.51			
力関係	3.11	1.10	3.05	1.19	3.00	1.38			
DV知識	4.34	1.05	4.27	1.07	4.41	1.16			
自尊得点	30.01	6.16	30.20	6.40	28.59	6.84			
他者尊重	18.45	3.98	18.75	3.24	17.06	3.89			
性役割	11.90	4.21	12.21	4.56	12.88	4.21			
アサーション	23.05	6.19	23.73	5.59	22.62	6.22			

＊p<.05

２）ＤＶ加害者の特徴

①ＤＶ加害者（合計）の特徴

被害者と同様に、ＤＶ加害者をＤＶ加害なし群（ＤＶ加害がまったくない、N=122）、ＤＶ加害低群（ＤＶ加害有りの中で得点低中位76％、N=154）、ＤＶ加害高群（ＤＶ加害有りの中で得点上位24％、N=48）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable６に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性（F(2,321)=6.09,p<.01）、怒り得点

Table６　加害(全体)の程度による平均値比較

	A 加害なし群 (N=122) 平均値	SD	B 加害低群 (N=154) 平均値	SD	C 加害高群 (N=48) 平均値	SD	多重比較の結果 A−B	B−C	A−C
基本的社会性	21.99	5.08	22.12	4.52	19.44	5.09		＊	＊
怒り得点	22.57	4.99	23.03	5.21	26.88	6.14		＊	＊
関係満足	12.05	2.64	12.10	2.75	11.48	2.94			
力関係	3.04	1.08	3.11	1.13	3.15	1.37			
DV知識	4.39	1.06	4.16	0.96	4.73	1.25		＊	
自尊得点	30.63	5.81	19.68	6.65	28.81	6.16			
他者尊重	18.39	4.01	18.73	3.59	17.19	3.91		＊	
性役割	11.98	3.82	11.82	4.43	13.15	4.84			
アサーション	23.43	6.50	23.05	5.70	22.85	6.06			

＊p<.05

(F(2,321)=12.26,p<.001)、ＤＶ知識（F(2,321)=5.86,p<.01)、他者尊重（F(2,321)=3.00,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ加害なし群（$\bar{X}$=21.99)、ＤＶ加害低群（$\bar{X}$=22.12）の得点はＤＶ加害高群（$\bar{X}$=19.44）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。また、怒り得点のＤＶ加害なし群（$\bar{X}$=22.57)、ＤＶ加害低群（$\bar{X}$=23.03）の得点はＤＶ加害高群（$\bar{X}$=26.88）の得点よりも低く、「高群」では他の群より

も怒りの得点が高いことを示していた。さらに、ＤＶ知識のＤＶ加害低群（$\bar{X}$= 4.16）の得点は、ＤＶ加害高群（$\bar{X}$= 4.73）の得点よりも低く、「高群」では「低群」よりも知識が低いことを示していた。

他者尊重のＤＶ加害低群（$\bar{X}$=18.73）の得点はＤＶ加害高群（$\bar{X}$=17.19）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも他者尊重が低いことを示していた。

②ＤＶ直接加害者

ＤＶ直接的加害者をＤＶ直接加害なし群（ＤＶ直接加害がまったくない、N=232）、ＤＶ直接加害低群（ＤＶ直接加害有りの中で得点低中位65％、N=59）、ＤＶ直接加害高群（ＤＶ直接加害有りの中で得点上位35％、N=33）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable７に示した。

Table７　直接的加害の程度による平均値比較

	A 加害なし群	(N=232)	B 加害低群	(N=59)	C 加害高群	(N=33)	多重比較の結果		
	平均値		平均値	SD	平均値	SD	A−B	B−C	A−C
基本的社会性	22.09	4.78	21.66	4.56	18.76	5.42		＊	＊
怒り得点	22.87	4.94	22.98	5.69	28.15	6.38		＊	＊
関係満足	11.93	2.82	12.44	2.62	11.61	2.32			
力関係	3.09	1.14	3.17	1.09	2.92	1.26			
DV知識	4.28	1.04	4.24	1.01	4.85	1.20		＊	＊
自尊得点	30.14	6.45	29.68	6.35	28.67	4.81			
他者尊重	18.58	3.80	18.20	3.23	17.21	4.81			
性役割	12.00	3.98	11.24	4.52	14.15	5.33		＊	＊
アサーション	23.06	6.14	23.80	5.55	22.70	6.33			

＊p<.05

分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性（F(2,321)=6.95,p<.001）、怒り得点（F(2,321)=14.94,p<.001）、性別役割意識（F(2,321)=5.16,p<.01）、ＤＶ知識（F(2,321)=4.52,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ直接加害なし群（$\bar{X}$=22.09）、ＤＶ直接加害低群（$\bar{X}$=21.66）の得点はＤＶ直接加害高群（$\bar{X}$=18.76）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。また、怒り得点のＤＶ直接加害なし群（$\bar{X}$=22.87）、ＤＶ直接加害低群（$\bar{X}$=22.98）の得点はＤＶ直接加害高群（$\bar{X}$=28.15）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。さらに、性役割意識のＤＶ直接加害なし群（$\bar{X}$=12.00）、ＤＶ直接加害低群（$\bar{X}$=11.24）の得点はＤＶ直接加害高群（$\bar{X}$=14.15）の得点よりも低く、「高群」は他の群よりも伝統的性役割意識が強いことを示していた。ＤＶ知識については、ＤＶ直接加害なし群（$\bar{X}$= 4.28）、ＤＶ直接加害低群（$\bar{X}$= 4.24）の得点は、ＤＶ直接加害高群（$\bar{X}$= 4.85）の得点よりも低く、「高群」は他の群よりも知識が低いことを示していた。

③ＤＶ間接加害者

ＤＶ間接的加害者をＤＶ間接加害なし群（ＤＶ加害がまったくない、N=137）、ＤＶ間接加害低群（ＤＶ間接加害有りの中で得点低中位67％、N=125）、ＤＶ間接加害高群（ＤＶ間接加害有りの中で得点上位33％、N=62）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable８に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性（F(2,321)=5.70,p<.01）、

Table８　間接的加害の程度による平均値比較

	A 加害なし群 (N=137)		B 加害低群 (N=125)		C 加害高群 (N=62)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A−B	B−C	A−C
基本的社会性	21.83	5.13	22.39	4.40	19.89	4.98		＊	＊
怒り得点	22.65	5.00	23.05	5.39	25.92	5.94		＊	＊
関係満足	12.00	2.71	11.98	2.76	12.00	2.81			
力関係	3.11	1.09	3.02	1.13	3.18	1.29			
DV知識	4.36	1.05	4.24	1.04	4.44	1.14			
自尊得点	30.47	6.11	29.74	6.63	29.00	5.93			
他者尊重	18.20	3.88	18.73	3.82	18.05	3.72			
性役割	11.82	4.02	12.07	4.36	12.65	4.71			
アサーション	23.50	6.28	22.50	5.88	23.76	5.82			

＊p<.05

怒り得点（F(2,321)=8.53,p<.001）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ間接加害なし群（$\bar{X}$=21.83）、ＤＶ間接加害低群（$\bar{X}$=22.39）の得点はＤＶ間接加害高群（$\bar{X}$=19.89）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。また、怒り得点のＤＶ間接加害なし群（$\bar{X}$=22.65）、ＤＶ間接加害低群（$\bar{X}$=23.05）の得点はＤＶ間接加害高群（$\bar{X}$=25.92）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。

④ＤＶ性的加害者

ＤＶ性的加害者をＤＶ性的加害なし群（ＤＶ性的加害がまったくない、N=246）、ＤＶ性的加害低群（ＤＶ性的加害有りの中で得点低中位71％、N=55）、ＤＶ性的加害高群（ＤＶ性的加害有りの中で得点上位29％、N=23）の3群に分類した。その後、3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable９に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性（F(2,321)=6.73,p<.001）、性役割（F(2,321)=12.41,p<.001）、ＤＶ知識（F(2,321)=3.92,p<.05）、怒り得点（F(2,321)=3.52,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ性的加害なし群（$\bar{X}$=22.22）、ＤＶ性的加害低群（$\bar{X}$=20.25）の得点はＤＶ性的加害高群（$\bar{X}$=19.30）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。次に、性別役割意識のＤＶ性的加害なし群（$\bar{X}$=11.67）、ＤＶ性的加害低群（$\bar{X}$=12.16）の得点はＤＶ性的加害高群

Table９　性加害の程度による平均値比較

	A 加害なし群 (N=122) 平均値	SD	B 加害低群 (N=154) 平均値	SD	C 加害高群 (N=48) 平均値	SD	多重比較の結果 A−B	B−C	A−C
基本的社会性	22.22	4.72	20.25	4.86	19.30	5.66	＊		＊
怒り得点	23.11	5.33	23.67	5.39	26.22	6.38			＊
関係満足	12.09	2.70	11.91	2.96	11.17	2.57			
力関係	3.07	1.11	3.28	1.18	2.69	1.35			
DV知識	4.24	1.02	4.53	1.10	4.78	1.28			
自尊得点	29.75	6.44	30.56	5.82	30.00	5.80			
他者尊重	18.68	3.66	17.73	3.88	16.65	4.85			＊
性役割	11.67	4.06	12.16	4.54	16.17	4.03		＊	＊
アサーション	23.05	6.21	23.45	5.58	23.65	5.57			

＊p<.05

($\bar{X}$=16.17）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも平等的性役割意識が低いことを示していた。また、他者尊重のＤＶ加害なし群（$\bar{X}$=18.68）の得点はＤＶ性的加害高群（$\bar{X}$=16.65）の得点よりも高く、「高群」ではなし群よりも他者尊重の得点が低いことを示していた。さらに、怒り得点のＤＶ加害なし群（$\bar{X}$=23.11）の得点はＤＶ性的加害高群（$\bar{X}$=26.22）の得点よりも高く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。

Ⅲ－３．ＤＶ被害者と加害者の関係

ＤＶ被害者とＤＶ加害者との関係を見るため、クロス集計を行った。ＤＶ被害および加害については上記各3群を用い、3×3の9群に分類した。その結果、ＤＶ被害および加害のどちらもない群は全体の約2割（19.8％）で、被害は受けていないが加害を与えている群が5.5％、加害は与えていないが被害を受けている群が17.9％であった。また、何らかの被害を受けている群と何らかの加害を与えている群をあわせると全体の過半数（56.8％）を占め、ＤＶ被害高群（被害有の中の上位25%）でありかつＤＶ加害高群（加害有の中の上位25％）でもあるＤＶ被害・加害高群（N=35）が全体の1割を超えて（10.8％）存在していた。これらの結果は、被害を受けるだけの人や加害を与えるだけの人よりも、程度の違いはあっても、被害者と加害者が同じ人であることを示しており、特にどちらの得点も高い群が存在していることを示していた。

Ⅲ－４．バトル群の特徴

被害と加害のどちらの得点も高い群を「バトル群」と名付け、その特徴を明らかにするために、被害および加害のどちらもない群（N=64)、ＤＶ被害・加害低群（N=114)、ＤＶ被害・加害高群（N=35）として比較した。3群での諸変数の平均値を比較するため、一要因の分散分析を行った。3群の平均値をTable10に示した。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、基本的社会性（F(2,210)=7.53,p<.001)、怒り得点(F(2,210)=8.71,p<.001)、ＤＶ知識（F(2,210)=7.18,p<.001)、関係満足（F(2,210)=4.80,p<.01)、

Table10　被害・加害の程度による平均値比較

	A 被害加害なし群 (N=64)		B 被害加害低群 (N=114)		C 被害加害高群 (N=35)		多重比較の結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	A-B	B-C	A-C
基本的社会性	22.45	4.68	22.57	4.08	19.34	5.10		*	*
怒り得点	22.03	5.12	22.82	4.59	26.37	6.56		*	*
関係満足	12.36	2.35	12.52	2.41	11.03	3.12		*	*
力関係	2.92	1.01	3.04	1.09	3.48	1.37			
DV知識	4.36	1.06	4.07	0.94	4.80	1.18		*	
自尊得点	31.31	6.31	29.92	6.61	27.66	6.16			*
他者尊重	18.72	3.74	19.01	3.52	17.60	3.43			
性役割	11.91	3.98	11.57	4.28	13.17	4.42			
アサーション	23.66	6.87	23.33	5.63	22.20	6.32			

＊p<.05

自尊得点（F(2,210)=3.64,p<.05）であった。Tukey法（5％水準）による多重比較を行ったところ、有意であった変数を以下に示す。まず、基本的社会性のＤＶ被害・加害なし群（$\bar{X}$=22.45）、ＤＶ被害・加害低群（$\bar{X}$=22.57）の得点は、ＤＶ被害・加害高群（$\bar{X}$=19.34）の得点よりも高く、「高群」は他の群よりも社会性が低いことを示していた。次に、怒り得点のＤＶ被害・加害なし群（$\bar{X}$=22.03）、ＤＶ被害・加害低群（$\bar{X}$=22.82）の得点はＤＶ被害・加害高群（$\bar{X}$=26.37）の得点よりも低く、「高群」では他の群よりも怒りの得点が高いことを示していた。また、ＤＶ知識のＤＶ被害・加害低群（$\bar{X}$= 4.07）の得点は、ＤＶ被害・加害高群（$\bar{X}$= 4.80）の得点よりも低く、「高群」では「低中群」よりも知識が低いことを示していた。さらに、関係満足のＤＶ被害・加害なし群（$\bar{X}$=12.36）、ＤＶ被害・加害低群（$\bar{X}$=12.52）の得点はＤＶ被害・加害高群（$\bar{X}$=11.03）の得点よりも低く、「高群」は他の群よりも関係に満足していないことを示していた。自尊得点では、ＤＶ被害・加害なし群（$\bar{X}$=31.31）の得点がＤＶ被害・加害高群（$\bar{X}$=27.66）の得点よりも高く、「なし群」は「高群」よりも自尊心が高いことを示していた。

Ⅳ．考　察

ＤＶ被害の実態に関しては、分析対象者の４分の３が何らかの被害を受けており、先に示した内閣府（2007）のインターネットによるデートDV調査による「男女ともに半数が交際相手から肉体的・精神的暴力を受けた経験がある」という結果を上回っていた。その原因として、何らかのＤＶ行為を１度でも受けたことがある者を被害者としたことが、被害者数の上昇につながったものと推測される。

一方、ＤＶ加害の実態としては、分析対象者の６割が何らかの暴力を振るった経験があるという結果であった。被害者と異なり、加害者がどれほどその実態を回答したか、質問紙調査の限界があるにも拘わらず、加害経験が６割というのはかなりの高率であり、DVが頻繁に行われていると推察される。

被害者と加害者を暴力の種類から見てみると、直接的のものが３割前後、間接的なものが６～７割、性的なものが２～３割前後であり、間接的なものが直接的なものの２倍程度見られる。直接的な暴力に至るまでに間接的な暴力を通るとすれば、心理的に圧迫される見えにくい暴力に注意が必要であることがわかる。

次に、ＤＶ被害者および加害者の特徴であるが、いずれも、被害および加害が全くない群、低群、高群に分け、諸変数との比較を行った。その際、ＤＶの種類の全体を合計したものの他、DV直接被害、DV間接被害、DV性的被害に細分化し検討を行った。

その結果、被害者では、DV性的被害を除いて「基本的社会性」が高群で低く、DV間接被害を除いて「怒り」が高群で高い。また、DV性的被害を除いて「関係満足」で高群が満足しておらず、「力関係」でも高群が相手の方が優位であると回答していた。これらは加害側での有意差は出ておらず被害者の特徴といえる。被害者であるから、関係性に満足しておらず、自分が劣位であるとするのも当然の回答であると思われる。また、自分の立場が弱いから、相手をつなぎ止めておくためにDVに我慢しているとも考えられる。いずれにせよ自己を肯定し、関係性の成熟を考える必要性があると言える。しかしながらDV性的被害に関しては、「基本的社会性」、「関係満足」、「力関係」のいずれにも有意な差が認められなかった。これまで、DVの被害において性的被害は語られることが少なかったが、性的被害者は特徴がつかみにくく、すなわち誰もがその可能性を秘めているとも言えるだろう。また、DV被害者は、従来から「自尊感情」の低さが特徴として言われていたが、本研究でも同様の結果となった。もともとの特性であるが故に被害者高群となったのか、DVの結果から生じた高群であるのかは判別できないが、いずれにせよ被害者においては自尊感情の改善が指摘されよう。

一方、加害では、すべてのDV群において、「基本的社会性」が高群で低く、「怒り」が高群で高い。これは加害者では分かりやすい結果であろう。怒りが高く、社会性が低いため、その怒りを暴力という形で処理した結果であるといえる。「他者尊重」はDV性的加害の高群で低く、DV加害者（合計）の低群で低い傾向が認められた。また、同様に「性役割」も加害者側にのみ出ており、DV直接加害、DV性的加害で高い。これらは被害側での有意差が出ておらず加害者の特徴といえる。DV被害者は「他者尊重」が極端に高く、加害者は低いと言われているが、今回は加害者のみに指摘された。「性役割」の高さについては、被害者、加害者共に指摘されてきたことではあるが、今回は加害者のみで認められた。性役割観は加害とのみ関連することを示唆している。

被害者は、「関係満足」と「力関係」に、加害者は「他者尊重」と「性役割」に特徴が見られたが、被害者と加害者の共通点としては、「基本的社会性」の低さと、「怒り」の高さが上げられた。

そこで、これまで、被害者と加害者は別の存在として考えられていたようだが、被害者でもあり、加害者でもあるという群が存在していることを確認し、それをバトル群と名付けることとした。この群の特徴は、被害者と加害者の共通特徴である「基本的社会性」が低く、「怒り」が高く、被害者特徴である「関係満足」が低く、さらに「自尊感情」も低い傾向にあった。被害者側の特徴に近いと考えられる。これは、被害者側に甘んじず、反

撃に出た結果の加害者とも考えられ、この点に関しては、仮にそのように想定すると、反撃ができることを肯定的に捉えることも可能であるが、それではDVの解決には結びつかない。この問題を解決するための糸口として考えられるのが社会性である。

DV被害者、DV加害者、バトル群のすべてを通して見てみると、ＤＶ性的被害を除いた他のすべてにおいて、「基本的社会性」が低いという結果であった。西岡、小牧（2007）は、避妊行動を規定するものとして男性側の「社会性」の問題を指摘したが、今回のDVにも「社会性」が指摘されたことになる。様々な場で社会性の不足が問題にされており、社会性の改善が急務であることが、ここでも指摘された。また逆に、「アサーション」は、DV被害者、DV加害者、バトル群のすべてに有意差が出なかった。DVが語られる際には、被害者、加害者のどちらにも、その内容は違ってもアサーション不足が指摘されている。デートDV、もしくは、今回の被験者である大学生に限っていえば、DVとアサーションはそれほど強い関係はないようにみえる。しかしながら、西岡（2004）の指摘する、一般的アサーションと親密な関係でのアサーションに違いがあるように、親密な関係におけるアサーションとの詳細な検討を行うことが、今後の検討課題であろう。

また、ＤＶ性的加害の基本的社会性を除き、DV被害者、DV加害者、バトル群のすべての被害および加害なし群と、すべての低群との間には、すべての変数において有意差が認められず、それほど違いがなかった。低群はこれから高群に移行する予備群的性質のものと考えられていたが、必ずしもそう位置づけられないことを示していた。では高群との違いは何に起因するのか。さらに分析していく必要があろう。

もう一点注目すべきところは、ＤＶ性的加害の基本的社会性のみ状況が違っていたところである。ＤＶにおける性的被害および加害は、社会性との関係において、他のＤＶ直接、間接、そして、被害、加害と状況が違う。ＤＶ性的被害は基本的社会性との関係が唯一見られず、一方、ＤＶ性的加害は他と同様に基本的社会性との関係は見られるものの、低群ですでに基本的社会性の低さが見られることから、性的加害においては、低群は高群移行予備群であるとして、捉えることができる。性的加害においては性差を含めてさらなる分析が必要であると思われる。

最後に、教育への取り組みについて考えたい。堤、横山（2005）は暴力のない社会を目指して、小学校社会科へのＤＶ防止プログラムの導入を提案している。また、飯野（2004）はDVの青少年プログラムとして、「aware」のデートDVプログラムの紹介と共に、教育の場での提案として、性教育を挙げている。そこでは性の問題を含めた、人の恋愛やコミュニケーション教育という形への発展の必要性を指摘し、将来的な構想として、コミュニケーションについての総合学習の必要性にも言及している。筆者らは、リプロダクティヴ・ヘルス／ライツの視点から、性を総合的に捉え、女性の生涯の、広い意味での健康を支援できるような教育プログラムが作成できればと考えている。そしてこれまでに、男女相互理解の観点より男性の健康も総合的に考えていく必要性や、教育の観点からキャリア教育との共通性も示唆された。今回の研究においては、大学生におけるデートDVにおいて、基本的社会性や怒りの処理に関する知見も得られた。今後は、男女がともにあるリプロダ

クティヴ・ヘルス／ライツ教育プログラムの作成にむけて、広い視野で、総合的な教育プログラムに発展させることが出来ればと考えている。

謝　辞

本調査の実施に際し、ご協力くださった皆さんに深く感謝する。また、データ収集および入力にご協力くださった本学、心理コミュニケーション学科の中井庄太郎さんに感謝する。

参考文献

1）伊田広行「「デートDV」をシングル単位的恋愛論と結びつけて伝える」、『セクシュアリティ』第32号、pp.16-21、2007年。
2）飯野智子「日本におけるドメスティック・バイオレンス加害者対策の現状」、『実践女子短期大学紀要』、第25号、pp.57-71、2004年。
3）川崎政宏、長安めぐみ、関口久志「デートDV防止活動の現場から－理解し、支援の輪を広げるために」、『セクシュアリティ』第32号、pp. 6 -15、2007年。
4）古賀絵子「DV加害者更生プログラム－日本及び海外の動向と、実施における課題」、『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』、第７巻、pp.41-51、2005年。
5）草柳和之、『ドメスティック・バイオレンス　新版』、岩波、2004年。
6）三沢耕平「デートDV：恋人に暴力、５割が被害　10～20代の358人回答－内閣府調査」、毎日新聞、2007年11月10日。
7）内閣府男女共同参画局「「男女間における暴力に関する調査」報告書」、2006年。
8）中島幸子「学校現場でDV防止教育は可能か？―全員が知識をもちサポートを」、『セクシュアリティ』第32号、pp.22-27、2007年。
9）永末貴子、石井朝子、木村弓子、黒崎美智子、村上由佳、岸本淳司「ドメスティックバイオレンス被害児童の暴力の実態と精神健康」、『ストレス科学』第21巻４号、pp.233-242、2007年。
10）中村正夫、『男達の脱暴力－DV克服プログラムの現場から』、朝日新聞社、2003年。
11）中澤直子、片瀬　高、山下　洋、吉田敬子「ドメスティックバイオレンスと若年出産」、『産婦人科の世界』第58巻１号、pp.35-42、2006年。
12）“人間と性”教育研究協議会『セクシュアリティ』第32号、エイデル研究所、2007年。
13）西岡敦子「「リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ」に関する調査Ⅴ」、『大阪国際大学・短期大学部　女性学研究所年報』第６巻、pp.15-21、2004年。
14）西岡敦子「「リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ」に関する調査Ⅵ」、『大阪国際大学紀要　国際研究論叢』第19巻、２号、pp.97-114、2006年。
15）西岡敦子、小牧一裕「「リプロダクティヴ・ヘルス／ライツ」に関する調査Ⅶ―社会性と避妊行動について―」、『大阪国際大学紀要　国際研究論叢』第20巻、第３号、pp.33-43、2007年。
16）NPO法人DV防止ながさき『大学生におけるDVに関する認識についての調査』2007年。
17）「夫（恋人）からの暴力」調査研究会、『ドメスティック・バイオレンス［新版］』、有斐閣、2002年。
18）下地久美子「ドメスティックバイオレンスから逃れられない被害者心理の一考察」、『武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要』第３巻、pp.210-217、2001年。
19）相馬敏彦「博士論文　親密な関係における排他性が個人の適応に及ぼす影響」大阪大学人間科学

部博士論文、2005年。
20）相馬敏彦「親密な関係において暴力をふるう男女の愛着モデル」、『日本心理学会第70回大会口頭発表会要旨集』pp.263、2006年。
21）鈴木淳子「平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成」、『心理学研究』第65巻、pp.34-41、1994年。
22）鈴木　平、春木　豊「怒りと循環器系疾患の関連性の検討」、『健康心理学研究』第７巻、pp.１-13、1994年。
23）高橋裕子「それってデートDV？―こうこうせい、あーいえばこーいう」、『セクシュアリティ』第32号、pp.28-33、2007年。
24）堤　かなめ、横山美栄子「ドメスティック・バイオレンス（DV）に関する日本の現状とDV教育の必要性－小学校社会科におけるＤＶ防止プログラム導入の提案－」、『アジア女性研究』、第14巻、pp.63-71、2005年。
25）山口のり子『若者のためのデータDV防止プログラム』、awere、2003年。
26）山口佐和子「アメリカにおけるドメスティック・バイオレンス加害者教育への取り組み」、『金城学院大学大学院文学研究科論集』、第11巻、pp.81-98、2005年。
27）山本　功「大学生の暴力観・DV観－首都圏大学生への質問紙調査から－」、『淑徳大学大学院紀要』、第12巻、pp.321-324、2005年。
28）山本真理子、松井　豊、山成由紀子「認知された自己の諸側面の構造」、『教育心理学研究』第30巻、pp.64-68、1982年。